

講評文

12月25日 5番目

金沢商業高校

「当たり前のこと」

ある日の演劇部室。面接練習に苦しむ伊藤は、部員の山本、渡辺、小林に担当の田中先生の愚痴をこぼしていました。それは彼女たちにとって、いつもと変わらない日常のはずでした。しかし、実は演劇部には顧問がおらず、さらに倉庫の道具まで勝手に処分されていたことが発覚し、演劇部は廃部の危機に追い込まれてしまいます。

印象的だったのは、音響と照明の演出です。劇中では、吹奏楽部の練習音や、ダンスシーンといった特定の場面でのみ音を流し、それ以外ではあえて音響を使用していません。これによって、学校生活のありふれた日常がリアルに表現されていました。また、ホリを使わず、舞台上を全体的に暗くすることで、部員たちにとって望ましくない結果になることを暗示しているのではないかと考えられました。

演技面では、セリフの『間』を巧みに使い分けることで、張り詰めた緊張感が客席にも伝わってきました。また、部員のうち2人が観客に背中を向けて発声練習をする場面では、キャストの2人は後ろを向いていたにも関わらず、彼女たちの声が客席までよく届いていたことにも感動しました。

議論を深めていく中で、『この劇は、教育の現場が抱える問題についても描いていたのではないか』という意見が上がりました。今日、社会問題となっている教員不足は、子供たちの活動や育成にも影響を与えます。本作では、そういった現実を突きつけることで、先生がいて部活ができるという環境が、決して当たり前ではないことを伝えたかったのではないのでしょうか。劇全体を通して、自分の周りにある『当たり前』の尊さに改めて気づくことができました。自分たちの大切な居場所が奪われてしまったとき、それでも懸命に前を向いて進むことの大切さを私たちに教えてくれる作品でした。

金沢商業高等学校のみなさん、お疲れ様でした。